



桜井孝身の絵の世界 ●深野 治

3

桜井孝身の二十五年にわたる画業をふり返ると、大別して三つの時期に分けることができる。

一九六四年の第一回渡米以前の、初期作品群がある。当時の絵を、たとえば渡米直前に福岡市の因幡町で開いた小個展に即していうなら、暗緑色や灰青色を基調として、骨と筋ばかりに痩せさらばえた人物像が宙空へのあこがれに身もだえるモチーフが多かった。闘争的で攻撃的で、それでいて救いがたく孤独で、あこがればかりが宇宙に凝結する暗鬱な世界が、そこにあった。二十代の青年の感傷と孤独が彼の心情もあらわに、むき出しの痛々しい裸身で示されていた。

桜井と同世代の詩人、大鶴竣朗(詩誌「詩科」以来の友人)の詩編は、まさに桜井の絵の主題でもあった。

貝殻のように真っ青にぬれて僕らは海辺にいた / 僕らは何も待つてはいなかったが 僕らの視界を遮るものとして何もなかったから / 僕らはまさしく墓のように渴いていた 僕らは顧みてはならなかったのだし 翼も鱗も持たぬ僕らに / 立ちつくすほか何がなしえたろう (途上序唱)

桜井は、しかし、翼と鱗を求め続けた。彼の初期作品群の痛烈な寂寥にもかかわらず、彼は人間のつながりの奥に、翼をもって飛翔し、鱗を得て遊泳できる世界のあることを確信する桜井孝身であった。それを暗示するものは、その後も桜井の絵にしばしば登場する長い箱型の表象である。